景清外傳

一編

へ13
2891
1-

へ13
2891
1-15

自序

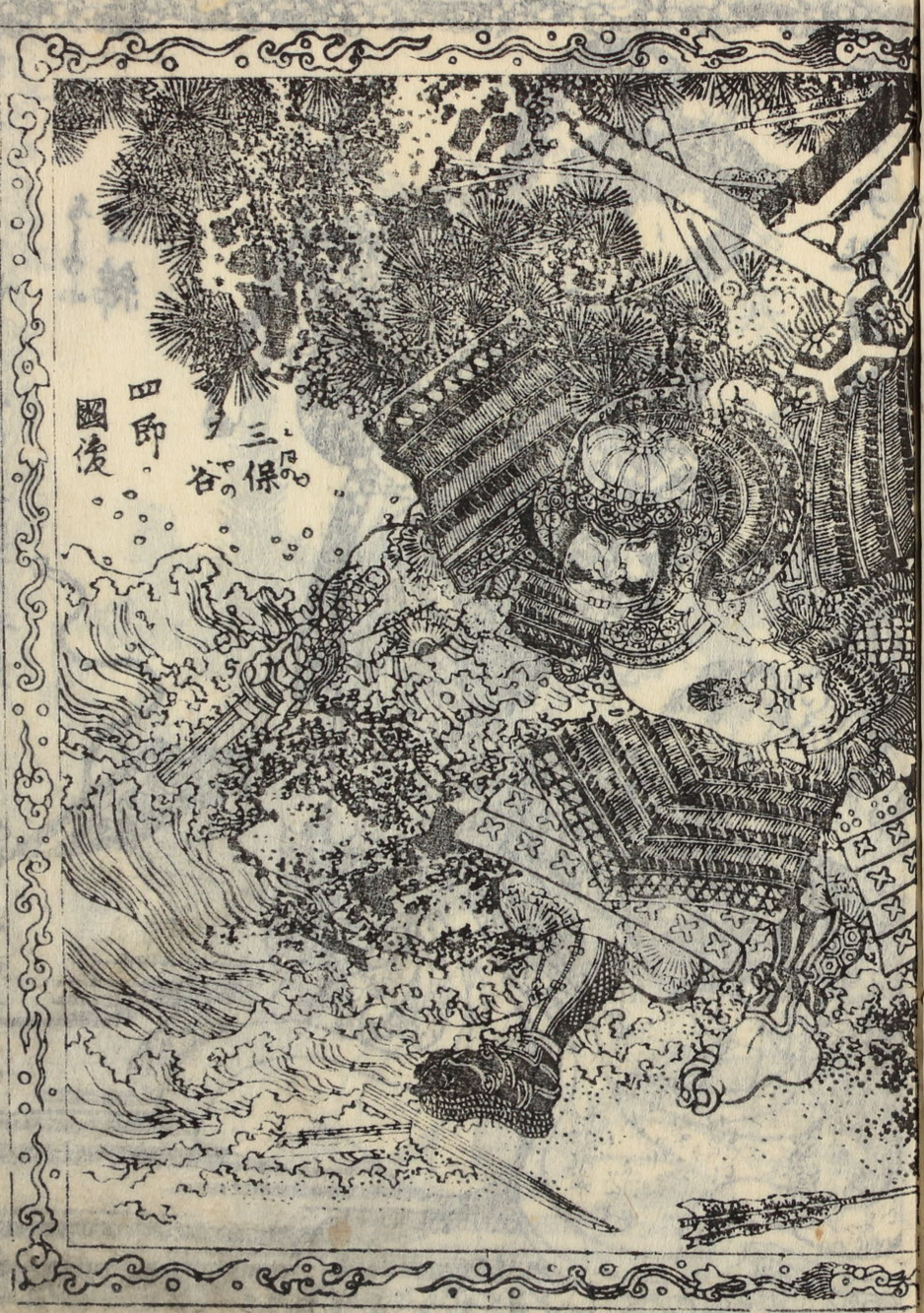
景清ゲ夏ハ舊よりと言傳へて其名高し世ゲ為源平治乱紀を閲るに當世ハ武勇士の士武藝を修ん人一世の功を樹ん事を願ひ其人ハ忠義を尽すべし精忠国士の裏を得ず而れとも武百歳乃今に伝ゆる童幼其勇名を聞て其傳を全ふせざるを

昭和九年七月三日購求

今年書肆平川館主人例の稗史小景清が
変を作てよろこぶ事尋爾として
本邦の稗史と船来小説を翻案して
景清が傳を偽作す稿半に及ぶ始て思へらく
蛇足にして嘉清が霊ねがはくば必ず責んと謂ふ
月平川館未催頒之辞ふ故を以告平川館白玉堂
笑曰先生稗史を作る義許ぞ皆古人の傳を
偽作を登録ぞ何霊ぞ恨を述る或ぞ
清ふ却て恐ふ何ぞ曾先生乃稗史を作る
其実傳とりく巻末に附録を然れば虚実霊
朦晦を免ず今景清が変も又爾平彼若霊
なば喜来て謝氏述人疑らくは先生不律を
執て懶く辞をなふ世言或以を為ふ却て再業
を起す一場の戯を結局して平川館に投ずと爾

文化十二乙亥孟秋　絳山戲墨

門へ 13
2891
巻 1



両眼天桃從鏡
白綿
發一眸春水
眼人寒
大日坊

人間所謂好男子
我見婦女留鬚眉
奴顔婢膝真乞丐
反以正直為狂癡

長田敦平

季頼妻
玉苗

長田季頼

袖拂青樓花
滿衣餘歌宛
轉世應稀空

白柏子
阿古屋

中淺處聞清
響欲遠行雲
不遺飛

阿古屋毋
五十奈

景清外傳松操揔目録

〇巻之一

第一回　奸僧色を擅まゝに法衣を汚す
　　貞婦節を全く白刃に伏す

第二回　死を望て悪戎翻して黄泉に赴く
　　讐を報孝を全く父家を辞す

〇巻之二

第三回　陽を誓しく壮子不義を免る
　　色戎好しくて麗人貞操を破る

第四回　智縣明斷義士をゆるす
　　舞妓の至孝病母を治す

〇巻之三

第五回　母の病戎患しく孝子苦身を
　　友乃恚を猜て秀才遠謀す

〇巻之四

第六回　龍神を祭と欲しく名刃を失ふ
　　君主を欺んとして身命亡を

第七回　涙を浮べて朋友義心を励ま
血を滴して兄妹疑念を散ず

第八回　栗津乃濱ゑ負婦賊を掠らる
湖水の沖ゑ義男貫ど欺く

第九回　旅客誤て怒て賊夫を報ず
狂女狂て援を主家ゑ乞ふ

松操五巻　摠目録畢

○巻之五

東都　絳山戯編

第一回

奸僧色を禮ゑ〳〵法衣を汚ま
貞婦節を守て白刃ゑ仕す

歳寒く然後松柏の凋ゑ後を知る。国家に忠臣現る。茲ゑ上総悪七兵衛景清ハ岩戸呑ゑ孤忠を抱く。名を後世ゑ遺〳〵た事。其人となり剛毅ゑ平家繽代の臣ゑ上総介平忠清が七男ゑて。母ハ尾張国大宮司が女ゑ前ゑ忠清妻あるゑて男女の子ども六人あり。産ゑ。その内ゑ後妻ハ没今下けるゑ。ゑ〳〵嗣ぎ子ども四人を生ゑ。僅ゑ二人の男子をもせり。一男ハ後ゑ上総大夫判官友経と云。二男ハ後ゑ上総五郎兵衛尉光と云。忠清ハ妻ゑ後ゑて力ゑ死ゑ。ゑ敷ゑ子ども死ゑ。二人の男子の孤ゑ死ゑ。ハ猛き心もいとゑ。ゑ今二人の子ハ

あれど。これさへ失なひてんゆへ後なき不孝ハ逃るはじめなれど今尚幾人の子どもあらしやと思ふ當時親しき人の勧にまかし。尾張國熱田の大宮司が女白絹といふを娶迎後妻となしけるに白絹容貌美麗のミならず正しき心だて人なれバ。継子二人を能そだてゝ實母にも勝りていつくしみかば。忠清おほくも悦びて限りなく。夫婦の間睦しく。三年の春秋を過しけるが麗しかりける因縁なりや。一人の子どもも生ざりしかば。忠清おりひろゆき男子二人ハあれども。まだをさなくの子どもを失ひしく心細さにけ今ハ再び妻をバ娶迎はじ爾るに三年拘留ても孫子のなき事を悲懐ぬあくまじと妻にも語らひ共に。夫婦諸とも清水の観世音に参籠して。白絹に子をあたへ給へやと丹誠を凝らし祈しに。大悲の冥助や蒙りけん其月より白絹ハたゞならぬ身となりけるが。十月を経て男の子

き男子をぞ生たりける。此年ハ是近衛院の仁平三年の三月にぞありける。忠清が悦び譬るに物なく。掌裡の玉とぞ愛しみける。此児生れながら左右の膝に大きなる瘤ありしかバ名をバ瘤丸と呼做けるが生立にしたがひて面ハ白玉のごとく眼秀て骨太く力ありて八九才にして重き物挑角抵戯に尚成人にも勝れり。されども性質剛毅にして平日に狂戯童業なども稍もすれバ忽ち若者を殴擲し或ハ乱妨狼藉なせども年紀増すにつれ童業を懲悲れて浸らず淳教ひを伏しけれ不在給下再覗忠清が異腹の才に大日坊といふ僧ありて幼き時より悪しき奸曲不良性質なる児なれども斯るものハ男にしおかバ奈何なる珍事を惹出し家名を汚すも知れずと叡山に登し僧となせしが。天性遂に変ぜずして成長しては其身の勤をバせず酒と色とを

好そこ血族このうゆめそ此我委しくしべ。おのげくらしとよ居るも獣獲遂ゆへ山を下つまくく。東山ゆる麻谷よ信べき不我求めくくとよ新よ寥寂まを居ると。こまとを秘密の行法堂と被為ゆ。嬉無式相ゆ。そまのそるくまぎ拙しく屋敷出式逃ゆけるゆそ。忠清是彼の不義を怒り且ハ嘆抜幼童のそ財よるよ。幼魂の不安ねべ逝去ゆ親父のとまを患ひもがとれゆまを。伝弟子とけべそ性乃。裏ぎるゆのあまやまと。深紀慈我ハく厳山ゆ出しく。倩とるゆ一ゆ九そ我年くぎ方見くも。斯る癖ゆ仕出しく。家義下り父の恩を傷ハ不孝ゆまるゆ。出家人ハ属縁我絶しゆ云なぐら。素兄我のとるゆまべ親しく時ハ絶しひしゆ今ゆまを絶て對面ゆるまべくらもと。此日より音問をまを断よけまを大日坊ハとまを式仏のく。慈兄のあまべ

そを嫌らゆまを妨らまこ。ゆのまるゆ。ゆ我ゆまを快然ことなるまをゆ。我ゆまを法まべまるくゆ。ゆ易しと共べまを。そも此僧の悪行ハ人も疎し悪ひと人ども。平家門の一人の。ゆまるゆまとゆ我ゆく。左視もまゆしく。世我孤まを易ゆまをゆ。忠清疎んじ果ゆと。ゆ事向ハ人ハ絶てまゆく。世居るまゆを。ゆ一ゆ我ゆく。殆雑式ゆ及び法まを。此ゆ賜ゆまるゆ。ハ尚ゆを強くしく。我非式兄ゆ絶ゆしく。嬉酒ゆのゆ。流ゆゆ驚ゆまを。今ハまも治まべゆ。ゆ人を教ゆて兄ゆ和ゆ人けるハ今後志ゆ我式改め拙しく癖とゆ世。ゆ一ゆ不義の挙動ゆべ。免さゆ人と言ゆ。歎き体ゆたゆまゆ。ゆ我ゆ老実の忠清歎くゆ式寡知ゆ。さまゆ兄の動ゆ。懲後悔ゆしく絶法ゆまを。ゆ兄ゆ我ゆ式ゆ。ゆ兄越の思ひをゆまとゆ。素我ゆゆあくゆ我。と我角の言ゆ及ゆしく。忽ち肯ひ免しけまを大日坊ハ

志まそまのねと心裡に歎びつゝ庵に女を遣しとかく志珠携来に於状ぞ。忠清のよく疑ふぞ。宣へるに我改めねと歎びけれども嬉しくて故よりやすらふ尚睦まじく慈愛まろことかぎりなし。大日坊我も我兄をなく悲しきほど想ひろがら日毎に兄の許に行通ひ安否を問つゝ濃やかなり。彼もまた忠清が解け行る我も包むこともなく兄弟へ語らひける。一日のみものごとくに。大日坊兄の許を訪ひけるに此日忠清は当国の鹿ヶ谷のほとりへ遠く還らずして太郎次郎の子ども八物学びに師の許に往く。と主子も家に居らず。此は弥生のことなりしが、いとながやかの夷乃日の弦音に情ぞや。あやまりて忠清が妻白縟は瘡丸と待女ぶとを待ひ伴ひて、新裁の縫を縫なく居たりしが當時小あまの鵜が空く飛び去る我瘡丸は又射撲だやと半弓を携へ後て遂むくわずかに遠の園に出去けるが待女ぶもさえとまろうも同じく垣の外に出て西白

縟一意に之を制まれど應ざりしかく謀を居る我大日坊は物蔭より白縟が容を窺ひみしが一途に見る情ほど天性の姿も衰へず而我ながら櫻花の貴ひもさるさる果ねむちきろふぞ騒てしま蕩ひとぶろ其人を今日見まつるのそろ傍に人の居らざりは近昆縁る和世職擣のいろぞ色を識べかりや留ちえそぶろ大の尼。新縁を忘し妻出白縟が袂をそと捉ひゆいろふ白縟の心。驚いて迫りん身を巢ひけるが。此の兄とは遂かたる她出やうく卸らしまへりけれ今さらいかもなく切うの我恨とえおやまぎいつも情なの。あ道身のうへを忠清に告まーの我ありく兄の怒にあちかなや。遠ぎかりてその間へおん身をつきまよのそていくても用うるよって思翻せ。と言ろまで、恐ながにおまるる憂き限袖まぞおまろものひたよ。我にあへる魂去り。兄の怒ら我勸解よ。只願おん言ふにく進んたるは。我は據へし起根情とねすん

ゆうぎりとかたり足なえて白綿の足袋を着し角の回廊をのぼり。新内を語りて
なぐさみ。やがて三五夜の月の光にあこがれ。ゆめ嬢とよぶ奴家が身の。
想ひを越えて義回絶世を驚かすひゆきこと元俗を思ひ出
家人よあまりのがれ。爾奥のごとき不幸にて嬢女の
名残負せんと。せきこのみぞ洗様。いとひまうせばなるべし。ひとり居
まべしとかるる憂ひの遺はてあり。死よ去と「色」と光悟しん既に自害成まる
當時。我夫こと成知の人。自害成とぐめそ后よ。あんこと義を絶ひ「ひ」を
仏憂くんおりひ法をとも。悲こと子を結めなべ夫の疑ひのうんもまこ哀
くてこちらもーぶ。おんこ先非を悔ひまく絶びさせのひへさそぶ
物の道理を知り。爾へ去のあと出ひきや。こん偽のく拙も希乃痴
情を遂んとへいらなる天魔の業きーや。殺人死とを女子の操とい

うで破るべき。其不去のこと人といきまけば大円坊は恥笑ひ。そ是ものどろの無を。
我ろくねども拙の恋の奴となるくうらふ。幾回当ひかくくも当ひ割れぬおん
このと浮屠氏は恋成せぬ中ふ。宮ろまれど背のり。例へヨのよたべるぞう。
法水寺の上人。迫令婦ふ懸者。法義貴ぶ二人まで子を産けこと
女犯あるとまてうへ人のうく知る不。尚そ金ふ和なり。牧拳るふ遠あら
んや。ぜんこのみるは兄弟の義を絶きくゆも懲ぜまふ。今赤形とは我仏之
義引ざるとそそぶまふ。中ろ色ーとたべるべき。山恋うるひのうもとふ手項
拙約さ。秘密の法ろく恋慕の一家成祈敬とべ。ろくなべ兄ろまぞや。
と又も頻ふ潤繆法く。強て奸嬢せんとも。當附痣凡小ろ成復父大と合て
立夜母の光景ふるのうも。縁故も同ろぞ一途ふ親成大ろ上恩ふうら。
面獲。小ろ成くち捨つ。大円坊ぶ襟上を。投ふとふーぶ二三間。翻行斗く

投居たりしが。皆々此様に猶女に陰謀ある事なれば大日坊は面目なく。慌忙逃
去けるとぞ。其後白綿は思ひあまりけむ。今日ちかくぞ人なき所へ痣丸を招き
よりて云へりけるは。おとゞ為るは阿叉れなる大日坊とぞいと渋猿今日爾々
の事あり。元斯は正しき面影にも弟なりとて我夫の兄弟の義を絶
あり頃は不通にありけるが先非を悔ひて真に絶けるかと今なりや。
そ志はせ申さんとおもひきとくして御勘気を赦しあひて故の如く裏
なくせさしありしに豈料んや其人は渾偽の謀にて只情慾を遂んと
今日ぞもと知れる。弟の夫に告る時は言ひも外は兄弟の間を隔
つる事も憂く。さりとて黙ても叶ぬ身は濡衣の不義の名を負ひ给ん
とも哀しければ覚悟の脱に捨しものや此身のたゞなくもあれてんと思ひ
今母が云れし如る言語に委しく又叫ずに縊ましのごとし。母は大に死さしめひぞ。

とのみ言ひ演は伏流ぬが痣丸年紀は剛なれど世に勝ぐれし怜利なる小因を孝
心深ければ我母の嘆きをあはれとも小潔きまでに居りが泣ながら母の脊を撫で
席ちて云へりけるは。今我背くは亦ぞ捨ぞ阿叉れの今日の面影へ死を
もとて一途に死んとせさしあまりのたまへ翻れの明日叉上の宮庭よりも
選ばれの妻を縊る。多ひるが阿叉は再び此家にまつたく申さるゝ
さあるのに。そのさなくとも思ひもあらば黒今より上扉谷の阿叉の所
坊に来るも我家にあさまするにと。よくよく申さん尚夫ある
舳のおもひ剰ちぐてもとめなんと勢ひある小白綿の大に驚き死まで
制し。年紀ゆかずとも今言し母が言に怨ぬやや。我武士の妻なるか不
義姦邪を以て言ひ掛し人を絶にもなくべきや。その座も立ず討果し身の潔
白を徹べきに。姦賊人は我夫の兄弟なれば他人のごとくあらむかく。

園の
大日坊
姫
婚獣ん
とも
石綿

忠清
大日坊

深く思惟して弟よ告げ給へ。先悟抜くくあるの式。弟式しく叔父の
坊を殺さんとあらば式奉まを参りかゝる。且そのくは武士の妻ゆゑ
仇げなき肱そと世の人口よかゞやん。子は恥辱をとゝめる式。おんこの冠と
ゝふ。伯父の方の甲斐なくん他のうつぶともりふらん。古石ふつは式ハ云わじ。たゞ母上
のは知ら。まゝく奈何ゝもなり。ゆゑ存命居るべきの憂ゆゑ哀しさ
ゝ。公方の眼瘍よりもとゝ云ふ刀投放ち既に自害と及けるべき白綿懸を押
止め。云ふまゝを疱瘡よ子なるべしと式母の死を止んと思ふゝ云ふを
おし強ふ。いろ〳〵と云ふ嫁式ぞや。さわとゝ云ふ式ぞ人をいつぞ笑ふ弁さる

べたそ。おとゝ云ふ後ひくゝやひたちつる死を止ん。怪ゝ儀ともあるとゝん。
必ず母が云ふとも。然く生の伯父式子やと云ふ疱瘡嫁〳〵。さて云ふ只今ゝ笑
あげたる疱瘡式。種〳〵ひくゝ自害を止ゝ云ふ嫁〳〵やゝ爾なり〳〵ゝ
いそぐ我親よ弟だ不孝をせん。うまくく歎きのひそと。ぞ刀を似あけ。
然ても尚疱瘡ハ母が事の掛意くゝ自ハ母が側を去やらぬ〳〵居たり。且
況這程ハ白綿が懸我子よ自殺のとゝ。その〳〵ゝ式疱瘡ハ孝をおく〳〵て絲
〳〵一旦死をば止ゝ〳〵。熟〳〵ひ物ゝ伯父命居ゝ奈何ゝ〳〵憂ゝ
逢ふのあゝ。悔とも甲斐なゝあるゝ。式決め憂ゝ。死んとゝ思ゝ疱
瘡ゝ。衛京ゝ女のきまくゝ彼式欺き何方へ。まんゝと沈思ゝ。俄ゝ一の
式。ゝ牛〳〵く疱瘡を側近く呼〳〵云ゝりけゝ。如家伝清水の親世音
ゝ宿願ゝ。日毎ゝ祈式ゝ。今日結願の日ゝ。ゝ祈式ハ堂

納んと嘆くおりひ屋を作るが事ふ移まく遅つまるまと我ふ代またまひ。
仏経式納めたべうとこ云ふ心やとの親子一世の別まぞと。そくべ
もうかけ。癩九母のこのひさる。ひをゆるとそくべ。明日ふ愛さん
と心往ふ念ふ作。命畏まいひ作まど。今見まの下別ふりや見へ西ニ低けば。
明日ふそまひつめといふよ白綿をかへ母の癩九よよくもねそも清水寺
の仏構式ふまで。徐く住作〳〵。
のうけ〳〵元なるべや。ふの縁く知〳〵
まて。我ふ清式へ独ぎるや。没へ辺式学文母をもまべ書の言式云ふ〳〵
知や角と口賢〳〵ふ云なるう母の命へ肯けと云とあるまやとい式まけば。
癩九何と回急べき。云ふるうふまべ准備をよくなるねと云ふく傳間ふへ
けるが。結附〳〵一巻の仏経を封じ拵げ出。
知〳〵ふ癩九母の弁たるく。掛意くるうう。側を去るふ恐び移ぐまも
家〳〵き命ふまべ辞ふ固く懐げふ。我家の門へ出なべう。必ひひくれば。
移つ戻つ躊躇ふの運びを遅うふ行り。弘強くも白綿へ紙包をふ〳〵やまと
作まべどとれや今世ふ名残うと。やくべ哀〳〵。其後背紙を伸上り。
うち見送まべ今へまやつへべ。
情の我子や嘆へくよ常く孝をあくを知の今日の云のく非つまへ見まこ孝
ゆく母ふ別ふりふ見の有まやとと思びくを御下ふ。と知作も妨めうる
といくべ急〳〵。ふまあくね急式発〳〵。清水寺へ逐遣まべ式兎てたべと

伏沈を信じて愛きゝ給そ八果しかゝ太郎二郎の
二人の子乃物よ程あく死やとと思ひまどろんうを憂き。せめて一生を待く。
死ぬ縁故成ぬ程せんと硯引よ一揮筆の世ぐまれぬ貞婦業をもり終焉の
とゝ死よ思ふとも。其の命をのろくとも名を後世よ残やうと思ふ母対面
の果八情ゆゑ思ふ勇ましく死既よ出を書果ん比しを太郎二郎ゝとの。
ゆゑと奴婢ホ。告ふよ白狐数ゆ。太郎二郎の二人乃子八なきゆゑ間ホ
て在るぞう。我よ考成おきとゝ。其の子よまゝとの紙今世のゝ為ふよ
たゞ一目ゝんまるゆと外房程を立出ゝ母ゝとゝ。暫時今我嘆光陰を
ゝゝうんゆ不審て異形の妨せんまゝ多。必定疑ひあゝゝゝと思ひ
如世ゝ外房の扉成固く掩戸て音ゆる。神ゆゝぬ為八憂ゆ。ゆゝ
知ゝで兄弟八何ゆゝゝ連だち。呂今還ゆ来ゝ。平生ふ給ゝく母

とゝの間の扉閉てあゝゝ。ゝゝ奈何ゝと不審。扉成掛抱ん入ゝゝよ。
固く掩戸ゝ開ゝゝ外面よゝゝ上猶ゝも寂ゝく回ゝ。兄弟尚を
怪ゝて。癩丸八居ゝゝゝ。侍女ホ八何慶ゆゝと。ゝゝ侍女ホ美ゆ
侍ゝ。ゝ侍ゝ弟の切ゆる夫人の癩丸程子を清水よ出ゝ母ゝゝ
后秘ゆゝゝゝゝ我ゝゝゝ遠避ゆゝ。ゝゝゝゝゝ
ホ兄弟八慶成ひゝゝゝゝ。ゝゝ奈何ゝゝゝゝ
よ今ゝゝゝ。ゝゝ成ゝゝゝ。ゝゝ我ゝ
上猶ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
象ゝゝ妻ゝを殺ゝゝ程ホ強入なんと。ゝゝゝゝゝ
喘息ゝて癩丸八。弛庵ゝ侍ゝ慌忙く。母の外房よ入んとゝゝよ固掩戸て
入ゝゝ。ゝゝ独ホよ伏ゝゝ泣涙なゝく嘆くゆゝ。太郎二郎八ゝゝ紀く。

癋丸何ゆへ爾謂ぞ。縁故我絶て世の孫といへども問へバ癋丸ハ深く歎じていふやう
出し。此ハ継我母上の清水寺に納めしと。今まで膚身ハなさず頸に掛の裏
書く兼て其手ぞ詠めたりと。是を探りや此継我披見つるに母上の辞世乃
歌の中に二人の兄ハ驚きぬ。と聞手逸しとむなしき膚に巻の経に
母の手して忠臣不事二君。烈女不更二夫と書く一首の歌あり。
命をハかろきにかへん世の中になからへてある恥もあるとも。
とぞ記したる。読も果ねに兄弟ハ躍かゝりて閨戸を。ひき開き
走入るに。ある無慙なる母の自ハ既に経の手に懐剱抜て心下を刺
貫ひて死居たる。兄弟三人とも我をく路や扶けとゞめ立て
嘆しハ相見目も哀れなり。中にも兄の太郎ハ涙我掛ひいひけるハ
まで尊の二郎に八継しき母にてましませども孝心浅からざるの我々いまで

未両我幾く日時よりハ養育御身に異ならず恩ハ産の母よりも増たるか。
せめて九牛が一毛の孝をもせざる情なさや。事今日に及ぶと見て何故の
心なるぞや。三人の子どもハ不便とハおぼさざりしと泣ば銭二郎もおなじく
おもひつく。太郎の大人の実の子ども恩義ハおなじ母上に孝をもなさで孫が
御前まゐらせ仕へまゐらしたるに。かくおもひがけぬ事ぞと嘆しけるが
今更たりとて。我の人ハ知らしめざると恨みも親我菓子のなかの孝子とて
老も見けり。癋丸ハかゝる涙我とどめ今日母と人葬式に出。ただ一人ありと揃
けり。阿呆大日坊の入来り。母の我捉へ事を責さいなむ我ありし縁
有我同じ大日坊我逐ひたるべまじ先后小人を清水に。ありしまゝん
とのごとく乗しかへく彼不我さ。争を尋べくに半途にて。迎るぎ
まゝりぬ。還りまらんとたちまいれども母の髪をおもひ出し。又清水へ志せば尚

母も驚くゆえ怪しけれと推死なんもそなふ孔還ふ。
斯侍漢きを達せるとゆへ彈くゆるゆ大日坊の面なるなるべいつくく雖義報
つるべき。とそあるゆ兄の太郎さへ二郎も同じく立あがる我ゆ義母の
姫汝ゆ後をてくあるべきゆいぎ結共ゆとゆ折くも大殿還ゆるゆ入りと家
僕のあるゆ手続くゆ兄弟三人こそ我ゆ。ゆとゆ父の帰ゆるゆ告ぎて
森谷ゆ起んとゆいるなる母人の死を告なゆ父乃今我ゆ結ゆ
我さ三人とも。父の還ゆ我ゆ迎ゆ。

第二回

死ゆ望ゆ我翻くく黄泉ゆ赴く
僕を報孝を全して父家我辞を
我ゆ上孤ゆ忠清ハ今ゆ六波羅へ出仕我く。同今まうぐ還りゆ出ゆ子
ども三人ゆ涙ゆうゆくく光景我ゆ不審てとゆ我同ゆ母の自害我兄弟ゆ。

かゆ涙くゆ流るゆぞ悶絶とくく言語ゆ。弟路我ゆ兄ひしゆ白綿ゆ
周ゆ池入くゆ。ゆゆ涙のゆゆ屍を。くくゆ涙ゆ。双の袂を露くけゆ。
手附太郎ハ我ゆ掛ひ有くとゆ。ゆゆ泣ゆ忠清ハ泣く妻ゆ
屍の色近くさくゆて。若弟我ゆ兄を遂く。其志ゆ健気とも。貞
烈なるとゆ感ゆ尚あまあ拳勇ゆ。せんくこのゆあ
なるゆ。我ゆ知せゆ。非業の死我ゆさとゆきゆ。ゆゆとゆ
ゆとゆ。悔ゆくゆ我顔ゆ怪しき一対ゆ。ゆ我ゆ
ゆゆゆ。ゆ世の業因ゆの世ゆ報ゆ。ゆ流猛ゆ。大日坊ゆ。ゆゆて。
想ゆを贈ゆ我。ゆ人乃ゆ我ゆ兄ゆ。兄弟の義を絶ゆ方ゆ我ゆ
かゆ。千回百回ゆひても。ゆ申ゆもなくゆ。十年ゆあまゆ
迎年ゆ坊のゆゆ。孫ゆゆなるゆゆとゆる我ゆく。兄弟の同ゆ

しと思ふ猶予もなく。今日しも此坊のまたゝせあひ年季の恋慕成就のひらけらし。憂しと思ひくらしてさまぐ。に諫め知しめど止めがたく。不敵の命も身をも用ゆべき此悪計ひたしとするが。良人殺ちがめく二人の子を呪詛して失ひなんと。いとおそろしくそのうち。奈何ともせんやとおもふおりて。疫丸出来て此坊が。遂去へいひ遣れど。今日ゆて止ぬとあしあれが。まく僻として何の用も憂く。且呪詛すれんどされんには一家の禍此上なし。其彼の身にもかゝれ。良人の兄弟とすてん大日此坊の外へ出なし。爾るを奴家が放残なく弟のごとく兄弟の義を絶ゐが考妣に不孝なるに増ぬるし。兄弟ハ左右の手のごとく。これを傷く再びつぐ。妻子ハ衣のごとく。これを破れバ新に更むと。邵堯夫の言けんことも有なるに。畢竟奴家が居れバこそ大日坊も悪念を発さすを果ハ血属ハ禍に

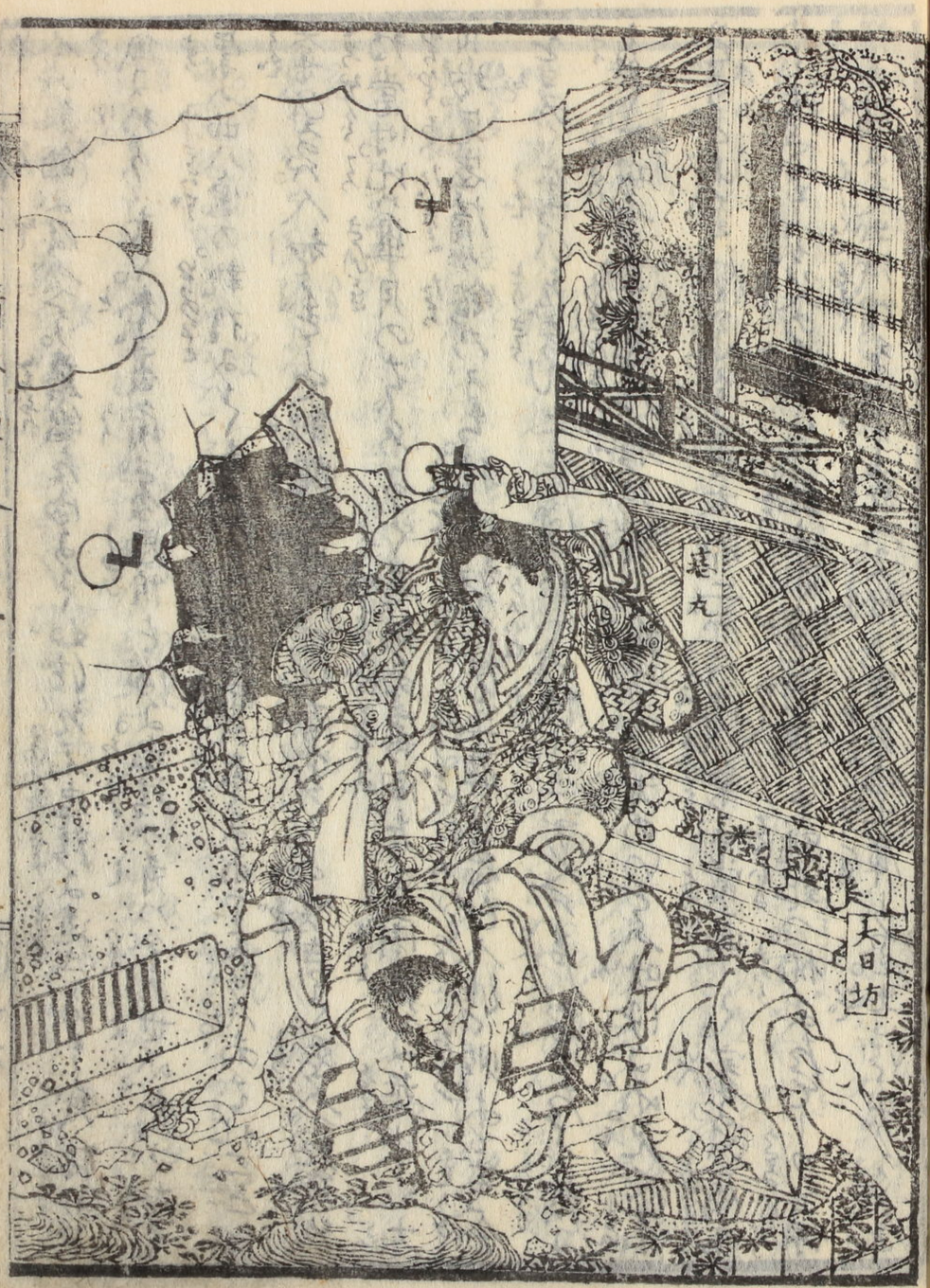
かゝる義ハ義を傷の至にて是亦残念なると依稀く。容貌も心を失ひけるなりね。彼らハ僧の悪念も絶なるべく菩提の種ともなるが。良人ハ孝義を全し。我又後世の助ともなりん。然ままを思ふ最期なりバ人こゝ呼ぎ嘆ひそ。畏くも良人にまめい三人の子どもの此義冗ハ何れ何と惑ひども擇弟ままはおのき弱ど太郎ある月ハ長子なりバこそまえて此優恤ありて早く妻をまくらしめ子孫の繁栄をなるまで良人二郎がるのも又爾てや疫丸がるハ庶子にてすべて二人の子と恩を同うるしあひそ。庶子を忘して断家を乱き例ハ和漢にまゝなりバあひかまへてよく心し良人へ。さて太郎二郎にもひとしく。奴家への孝心忘れずして嫉しうこゝを論るべし。此身なきなく消失ても。尚忘れずもおさんなれバ我にかゝわりて疫丸をよく教諭しくれ。良人へも。かんぞらの峯勤の疫丸によくつかへ孝義を全さし

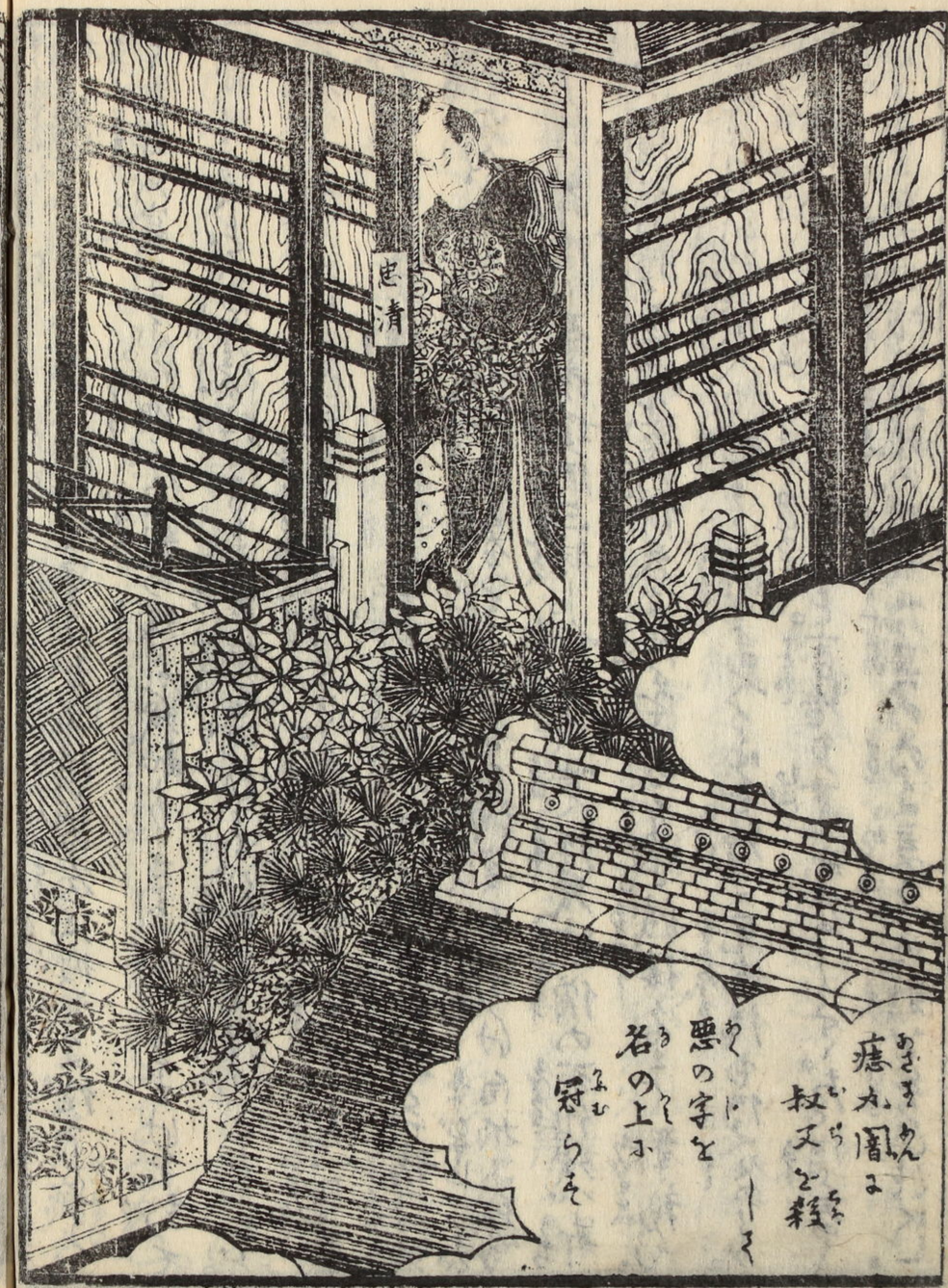
ちゝのよとなりてのち彩雲まつくもとゝ旦疫丸より送まとゝ沒ハ廣子のゝ[illegible]
まとゝ父上は孝ハ云までもなく二人の兄よりよく仕へ父をひとゝ敬へ[illegible]兄弟の
間睦く。あらんかぎりをつくべし。此言葉も忘れ一なゝ美泉の傳のまに此母が
永き勤亂世なりまゝ。よくく心ゆるひべ。尚人こゝ云まとさんへ[illegible]
たゞまでも後は生れあやかくく。そのあくまを去おくのこゝ名[illegible]
我良人よ。最愛の子どもゝ南無阿弥陀佛冥賀とゝ出たまとけり。
親子四人いとまゝ成ゝくまくさあぐくと嘆ゝける。此時忠清三人の子に打
對てこゝりけるハ母白綿ゝ最期の拵丈夫は物を自殺し其志孝成を
みせんハ我ふおゝくくハ信成ゝ[illegible]ゝ後ハ[illegible]ゝ孝成傷ゝとまとよるまく
とまゝ成ゝふゝ。ゝ悪けまゝど大日坊を。稽時さまくさゝ垂て。法師ゝ[illegible]
ゝを[illegible]尚志ゝを変めゝど。不良と成ゝなくゝ我兄弟の義とまゝ。

の[illegible]ゝ赴ゝ白綿ゝ後世のたゝ。とまゝ不増とめゝくゝ[illegible]
角まゝ白綿ゝ。終焉の言成ゝ。孝子とゝ云ゝけまゝと。云ゝ[illegible]ゝふ
子どもらハ父の命の道理あくよゝ[illegible]成ゝ[illegible]孝ゝ
さて斯ても果ぬとゝのまゝハ白綿ゝ屍をハ似強ゝ法ゝ送葬ゝ[illegible]
祭畔の畑となゝふけり。不在給下且縊大日坊ハ今日ゝ兄の辞ゝ[illegible]
嫡白綿たゝ独弟栽ゝ拵ゝ居成ゝ冥[illegible]会ゝと森ゝ[illegible]
葬ゝ。此の程成ゝさゝ縊迫ゝ情を遂ゝんとまゝふ。折ゝ[illegible]悪丸出来ゝ辛き
国成ゝくゝ逐ゝゝ。這ゝ逃まゝ還ゝゝ。熟ゝ今日の光景成ゝ[illegible]
き附ゝゝゝ。小紺者ゝ為ゝ妨げゝ。思情を果さね会卦ゝ[illegible]宝
のゝふゝ。ゝとゝ云世の強ハ[illegible]なゝ。必定今日の拵
たゝくく成兄忠清ゝ告げゝ。爾ゝまゝ今回も弟のとく。異成乃同と

隔ぬべし。縦ひ本懐を遂ざるさへ。世のもの笑ひとなる身ぞ浅ましく。恨を兄と甥にあやまつ人とや年比経しゆゑ。秘蜜の法をもつて妨する人を咒詛し殺しぬべし。手附を以て白絹が手活の花となすまじと心に念じ忠清の音耗を窺ひ彼是も大日坊。おのれが情慾のために兄一家を咒詛せんとして。つみで冥加を蒙らん。嗚呼是愚にあらずしてなんぞや。斯て忠清が妻の遺言によりて大日坊と兄弟の義を絶ければ止まりて。子細はいらで白絹が。自害のよしを云きりぬ大日坊はとまれかくて。大に驚き何ゆへに自害せられしと書かれ。手縁有る紙にも知りまいらせ忠清が許に行んと志たるが。再びおもひ直して。白絹ゆゑなく自殺はせじ。我恋まする紙に憂しと思ひ。死ましたるにあらざるか少しも疑ひの息ての云舟に安むこともなくその夜にありし。是彼を思ひに此ど纔に人容易く往ねむ志して。と彼病と

称じ嫂の死を弔らはず閑窓の室におのが狡邪の友等に誓うしめく。その有様を窺ひ。白絹が自殺の縁由を知よしさゝがなさず罪て見るに忍びず。忠清が許よりは屡病を問ひしが幾回か往んとせしも忍ぶ人も居らざりさへに庵丸の影縫くて兎角に往ふとはまずまで一日とも過ぎてけるにかねて親しき悪友の集ひ来りて梵然を厭ふとて姑の往式双六なんどをもしけるが漸く旁き後は酒宴を催して白拍子を呼来りて弾じ。益放蕩酒三昧に念仏を唱へ経を読僧の所作とは持ちく。護摩壇に魚を炙き仏器に酒を盛るなど浅猿しき事親子斯なれば此悪業をも知しく疎まれくぞ終に兄忠清も彼を訪のしが。明白に云人なき故に国は妻のうせたる言語も虚ぬなしく。ただ何となく遠ざかりぬ大日坊は近比の放蕩酒色のために身のほどをしらぬ財を失ひけり。


惡丸
天日坊


景清
惡丸闇に
紋又を殺
悪の字を
名の上に
冠らせ

今の飢餓に及べり。君臣たるものは元忠清の遠ざかるを悔めど
徒に彼の言なく。老ざる角ざる思惟をなす忠清が為は今の世に
堂の西八条の執権みくまりの為の財宝を奪ひ取べ。人知れずして飢餓を脱れんとなすと嘆きて。
結當時。北八条月の宮なる毎間なき国病に乗じ大
日坊。兄忠清が館なる土庫に忍び入て貯ある米金
をひそかに奪ひ去らんとせし時犬の怪しとなく声を聞く頻に
吠叫ぶに主忠清驚き醒し雑らある犬のいとふ吠けるに元て来
たりとあるを聞く不今青太郎二郎が西八条に當直して家の底丸
の居たるを見て父の暴を呼起つ。枕にたてし刀を佩
様の端に走出紙燭を照し窺へば怪しき男の土庫にあるを出て行く者を

頃刻上に踰んとせし刻又たく曲者を捕てじと斬りけく。刀の抜きはなを
急速の手程敏きまくに。彼曲者は完おめく中つるけん
鳴呼叫びく物音高く撲地と斬倒れ青忠清なるを。
老僕奴僕も陸続と走集ひ来く曲者を捕てくれといふ大日坊
ゆくあるを躍悔然と驚ひたるを聞主忠清は大日坊をものが者
引居さして声荒らげ。此程汝が悪行の不仁なるを知るべし
こゝにかざるを後悔き正行を。
息もだに隙よりて僅の為傷成業なとそ。おのく捕へらるまじ
不。先者はかるべき今はなを。命生べくあるを私なりと云
恨まくてそ見てよけを忠清再び云出ける。汝が生るものは汝が
坊のる紙云なのらん。そもく汝が生れ来る。若紙好まるを悪紙去

正なきことのミヨなるべ俗とーもぐべ限りなのき。拙悪人ともなのまやこと。
父母こまる我他人の人不良子ものどれ不便のまとのうふおぐーしに死法師
とーとうのーの人元爾とどもそ性愛草らまど身仏門ゐあまとなぐら酒を
好くろ我色ー。あらゆる要外なまとのあまの人我妻ハ汝ゐ嫂ろる我恵ひ
を知ーうのよハ一回なのくまど再びまで執念ふく恋ーうら白綿色を
憂ーとものひ遂ゐ食殺我るーたるぞや。色や汝ゐ放をのく死ぬくまべ
自我下さ殺ど殺ゐ殺ゐどー。妻の絶等ゐ出をせーふ奴家たるなく
るまーえべまと仏房と兄貴の義を傷殺ゐ為のこなるて仏房の旅
悩頓ゐ止ー吾心ふ日起ゐべ。ーまと不捨のあ恩とあ為烈婦ゐ言語法
ふ母ーと今日まぐ義をゐ絶ざゐまーー。辺比汝嫌酒ゐ酒を不自不殺ゐまを
ーーゐ折我寂ひ孫ん。ーゐ外我ん今病ーを兄の家ゐく物ゐまゐ。

かる因果ハ天公羽の疫病暗ふ母の仇を討ーゐのるあまなれと云べ底九
をーー出来ど母の仇討ハ冥加ーよかなふ孫ーさゐ爾ハひ阿父ゐあるさえゐ。
ゐ月ハ出家我害を為ーと。いと異ーるりひへべ阿父母の美泉の道遥ゐ小人ーり
りひなん兄さを多人父上と既ゐ自害ーるを人ゐる時大月坊ハ若ーげふやゐ
疫九ゐ何ゆゐ。爾ハ血ーへく慌忙ぞ。父母の態ーゐハ共ゐ天を戴ーるど。と
阿父ーく母の仇なるハ討ハ身の誉なる我いるぞ。自害を做べきぞ。
と傷ーゐ孫ーと云さーく。兄忠信ゐるーち背ひ選ーひ兄人ゐ四十年九月
の非我ひ今度ぞ知り我嫌ゐの。郷ふ死ーたる絶等付ふ拙ーしたる一言ゐ。
年月流ーー煙ーるを遥ゐ増ーく悟ーゐる。我奈何ゐるまべ父母や兄のひ
ふ病ゐ仏ぞ放逐ゐ離のゐ我のーー。ーとゐふ我猫や父母のかゐまーーも
黒髪我剃ーーゐあーさ爾ハーのく知ーまなぐら偽ゐ仏ぬゐーと酒ゐふ迷ふ

かゝる非業の死を遂ぐるハ神佛と親の冥罰の報ひくるハ未来永々奈落に随ちなが
らく浮む世あるべからず。況の家系の所父を二度ぞ殺害の科と云かく
其身の不孝はかく性を殺と云ふも又忠孝にやかう。不肖の身ふ入りども。
身の非を悔ひく悪念を翻ていふどふとも了までの罪科をゆるし
あり。今世の縁は動きなく稟ハ黄泉に趣き父母にもまろく貢作をされん
ことゝいと哀れなく迷へりと云ふも苦しき光景ハさしもの悪僧死ぬ臨ミ。
忽ち善に赴くことぞ烈婦か貞節の義に感じけるうなかりし忠清
ハ最前より大日坊が云言葉熟く臥の日頃までハ似げなく正しき云ぶりに
終に望み臥のけるに疑ひもなく善心に翻りしと感激し。そゞろ涙にうち
けるが母わら言葉正なり。悪に強きハ善にも強しと此房が今の云ぶり
そぞろく。思ふに善に還りたる其志まハ偽ならじとおぼへず手で袂を絞ん。

心遺きれど程生ありし又蔵丸が身の上ハ此房が孫なれバなん一旦子ハ起
に溺るにあらじ孝養を尽さねば為なるかも。爾ハありし親の継嗣ありきて
阿父を殺せし女なれバ。そのまゝおかんハ終よろうぞよろしくもなしの例よ
ならひ悪といふ字を名の上に冠らしめんと云果て。やがて我子を顧ミ
汝母の継嗣なれバ。父の敵殺しぬれバ斯ておかんハ我父母へ何とも云ん
辞なし。爾ありし孝子を罰せんと見まくも思ふべきにあらぬを汝まで七男
たりし我あく。今日よりまなを改めよ。悪七兵衛景清と名乗りて阿父を
殺したるの我人の目ゆう去よよ更にまく逸れよ父が家名立去りて大宮男
の為尾張国熱田宮の大宮司が許に暫時潜まり居りてその身の不孝を悔み怨じ。
身に報いで死を怠れ。なべきかどふなさん此とや君の恵みの再び都
に登るべし。その時まづ父子の對面をなさんとぞ云ひそよ我もおわぐ

とゝ〳〵も尾張よりの上下を孤と云ひけるに癒九は道理せゝ〳〵父の命背く
ゆゑ〳〵もあらぬ且天後の御代に大日坊は二度戒名頻なりしを
たゞ〳〵言のみたゞけるえゆゑ〳〵ども苦痛の苦をまゝらぬ
よう戒名一声唱と叫び〳〵その事恩は絶へけるが孤く豈悟乃
恩情も又今さらゆゑ兄弟の相別難苦の情まで〳〵そぶ後後の言々なるに
癒九ちゝ父の集へる奴僕も続とも涙ぞ神よあまりけるやあり
忠信は別てもおゝ〳〵正なるとの上大日坊が屍を似検さを問へるに
ゆかと明るけるに此時二人の子どもらは當座よりたゞ還て来るに忠信是
ゆあるゝ〳〵の戒詳の語知らゝ〳〵もるゆ一郎太郎は戒名癒九が仇討せ
と大日坊が善ゆ羽〳〵と且は父ぞ両全の計らひ〳〵を感賞せるに
后大日坊が屍をば麻谷の墓葬〳〵く厚く善提を吊ひさて癒九をば人を

憐〳〵尾張の拙田ゆ下〳〵けるに癒九は父の命ゆ尾張國拙田の下〳〵を大宮
大宮司夏茂ゆ對面〳〵母の死を着と〳〵大日坊を聞の仇討〳〵且父の命ゆ
此地方ゆ下るまでの有枝有朱戒和母ゆ居〳〵〳〵の者人と
越の彩〳〵七人の且び夏茂妹の死を着の人を居るに故を知ら
ざるに〳〵今癒九が拙潔のその委〳〵き戒笑〳〵ぶ且は嘆き且は三人ともの
戒感激〳〵と且下るに癒九をとゞめ吉日を卜て加冠さ〳〵戒悪七三郎景
清と名乗〳〵我子のごく最愛び景清もまゝ夏茂の仕ゆるとゝ父のごし
景清が性義勇あるとゝ茅の流た虎ごく今も尚豪傑王なの〳〵不在活
下再流尾張國内海と云地方ゆ夏茂が外家の一族ゆ長田平次季致と
云の人あるけり生質篤実なる人の夫道戒好き者を委く学ぶ〳〵
ちゝ今耳順の齢ゆいくに性学の学人世ゆ高く遠き國の人〳〵も来り学ぶ

女、父母さとび頁茂中文の道乃あとにいと親〜ゐまた然ゆゑ頁茂業を
を以程我家よりおこたそのの周旋を家人より武藝の熟ととゐ兵ども文乃道
ゆへ疎〜と云へ〜季致より後ハ〜やく。文を学ぶ〜たらんゐへ天晴良士なり
なんと。勢を生るまるひらら。頻より志ひたち〜ゑ一日景清我辺付へ。元我士
たらんゐへ文武の道より疎くてハ。ふ光をとゆゆきのなる。足下ゞ弁を
家ふよ弓矢打物よりおのくゐへ。當学ゐへ名我ゆゆ勇士ゆおさく劣ゆ
惜むいゐへ文道ハいまゞ熟〜ゐぬとゐ西ゆこと我学んいゐふゞとゆ
小学人けるゆゞ景清とよゐのく森びくゞとハおき今ゐなゆ小人稼てそゐ我。
ゆよ金〜ゑり作ゞ大男ゆの我かゆ。今日まゞ云ゐゞゐ。今の今いと
嬢〜。我るべき作我撰さ〜。ゐゐとゐ〜ゑ夏茂のそむを森びて爾る
我ゞ人のあゐ我知ゞ。云ゆるとの間よ今〜いとも愛たくゆゑ幸なゐゐ我

外戚の血属なりとける長田季致ハ性学の名ハ武国ゐるくゆ我ゆ
都乃書生ゆもさく劣ゆ明日ゆるゆ彼人我師と我ゞ勤めく学ばゆへと云
ゆのこゆゐよ景清ハ感謝我ゐ〜く父雪ゆせゆ。斯く悪七兵衛景清を大
男の命ゆ後ひく長田平次季致我師と我ゞ佐く只顧ゆを教道我授りて。
倦とゐくゐ怠ゞゞ学ゆび勤ゐるゆゞゆ孫て都よゆ〜ゆゐ〜ゆ
学ゆび〜とゆゐさへよ才ゆまく猪ゆ〜ゑ幾月を学ゆゞゆ。ゆ〜ゑ
まゐゆびたる門生ゐゆたゐまされゞ季致ゐく〜才我愛遂ゆ夏茂よ
幾ゆ。只顧ゆ我家よゐゆ。ゆゆ問とゐゐ〜。とゆ季致が子ゆ平太季頼と
云ゆのゆゆ生質温順ゆ〜く父母よ仕へく孝行ゆのゆゆゆゆゆゆゆゆゆ容貌
いと醜〜。この妻を玉苗と呼ゞて容貌美粟なゆゆゆゆゆゆゆ貌よ
仍ゞ。嫌我をゆく好く。平ゆゆもゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

其心樂まずぞありける。爾るに近比七条院景清こゝに寄寓し居たりしが。
景清今年十七才面ハ白玉の如く好男児なる上人ハ都に生育ぬれバ
周旋も都雅なるゆゑ尾張あたりの鄙人と違ひ類ひもあらざれバ玉笛
ハこれを垣間見ありしより此小年が妻たらんものハ女の甲斐ありぬべし
と懸恋の溺情頻りなり。奈何もして知せまく思へど然れども景清
猥がはしき事あらバ舅や夫のめがくれ。礼を正しうきびしく家裡の男女
を一席ゆるさず居らしめ孫がいふ事もまたかなはざりしが心裡ハ忘ざるのみ
空しく月日を送りけり。頃ハ仁安二年の秋の比。李致風の心ちして打
臥たりしが日にそひて衰へ病重りけり。なるほど今ハたのみなく
薬もさらに効なくて李頼ハさまざま心をつくせど。景清も共に心を悩
まし益夜となく看病しが天命終に尽きしかバ李致五十

余才なりし。今年の秋の白露と消えし淡命なれバ李頼が嘆き景清が悲しみ。
また比ふべきものなかりけり。斯て李致が屍を送り葬を了り。古墳一基の
主となりぬ。さて景清ハ師と頼みし李致失てハこの家に居るに
易ならねバ大男大宮司が許に還り独学の窓にこもり居たりしが尚李致の
墓なりし月毎の忌日にハ必ず内海に到て師の墓に詣で霊祭その後
さゆへ李頼と問ひぬ一月忌日にハあなさ孫ども久しく李頼が許にとゞまりく。
内海に到りて師の墓に詣で、それより李頼が許に赴しが近頃ハ李頼不用
の事ありて、他へ出しより己が家に還る時一人の不案内ありて景
清が決へども我家中より今日家主ハ在宅なりがたく用なれバ池の辺に出
清ていかにと思ふに兄弟して尋る人ありとのたまへバこれにまことありける
をよくとて今日方より使ありせんとのものしたれバ當

時の不國のうち来のふとさなるひのれるのるれが。這程へ入らせ給へ。外のえ
あげ給ひてとまへ人の命てりれまづ入らせ給へやと。云ふゆるの景清。
そは奈何なる用ゆやと。不審の仕小室の程ふ入れける。山村玉苗出来れ
一別の后恙なるをとぶきさてや出けるへ因今不審が外へ出でく。
夫人のやおそしふ。ある人死出辛ふまいくまとべく。ちの折うこたらせ給へ。
こゝのなのき幸ともやべき。孝新人今ふ選ぶたぐらん。暫附れ給せのうなよ。
人を待ち月ハ徒然ふ。恨ぬのうち山酒ハ屢こくハ沙人ども。とまきこと
て屢こ多人と共寄住酒共さーふー。不審一人を酌ふ殊ー。その為ま
奥さまのふ入りける。玉苗が心奈何。此後何事とうと。そこ次巻を開く
知れまへ人ー。

景清外傳　松の操　巻之一